

極限

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

2020年4月15日

定義. C, D を圏, $c \in C$ を対象, $G: D \rightarrow C$ を関手とする. コンマ圏 $c \downarrow G$ の始対象を c から G への普遍射 (universal arrow) という. 即ち, 以下を満たす組 $\langle d, f \rangle$ のことである.

- (1) d は D の対象である.
- (2) f は C の射 $f: c \rightarrow Gd$ である.
- (3) 組 $\langle d', f' \rangle$ が同じ条件 (即ち $d' \in D$ で $f': c \rightarrow Gd'$ となる) を満たすならば, D の射 $g: d \rightarrow d'$ が一意に存在して $Gg \circ f = f'$ となる.

$$\begin{array}{ccc} c & \xrightarrow{f} & Gd \\ & \searrow f' & \downarrow Gg \\ & & Gd' \end{array} \quad \begin{array}{c} d \\ \downarrow g \\ d' \end{array}$$

双対的に, コンマ圏 $G \downarrow c$ の終対象 $\langle d, f \rangle$ を G から c への普遍射という.

$$\begin{array}{ccc} & & Gd \xrightarrow{f} c \\ & \uparrow Gg & \nearrow f' \\ d & \uparrow g & Gd' \end{array}$$

例 1. $U: \mathbf{Ab} \rightarrow \mathbf{Set}$ を忘却関手とする. 集合 X で生成される自由アーベル群を FX とし標準的な包含写像を $i: X \rightarrow U(FX)$ とする. このとき FX は以下の性質を満たす: 任意のアーベル群 A と写像 $f: X \rightarrow U(A)$ に対して, 準同型写像 $g: FX \rightarrow A$ が一意に

存在して $Ug \circ i = f$ を満たす.

$$\begin{array}{ccc}
 X & \xrightarrow{i} & U(FX) & & FX \\
 & \searrow f & \downarrow Ug & & \downarrow g \\
 & & U(A) & & A
 \end{array}$$

即ち, $\langle FX, i \rangle$ は $X \in \mathbf{Set}$ から U への普遍射である.

この意味で「自由アーベル群」は集合からアーベル群を構成する方法としては一番《自然》と言える. \square

例 2. C を圏として, $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とする. $\langle a, b \rangle \in C \times C$ から Δ への普遍射 $\langle c, \langle f, g \rangle \rangle$ が存在したとする (ここで $\langle f, g \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c$ は $C \times C$ の射である). つまり, 別の射 $\langle f', g' \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c'$ に対して射 $h: c \rightarrow c'$ が一意に存在して次が可換となる.

$$\begin{array}{ccc}
 \langle a, b \rangle & \xrightarrow{\langle f, g \rangle} & \Delta c & & c \\
 & \searrow \langle f', g' \rangle & \downarrow \Delta h & & \downarrow h \\
 & & \Delta c' & & c'
 \end{array}$$

これを圏の直積の定義を思い出して書き直すと, 次の可換図式になる.

$$\begin{array}{ccccc}
 a & \xrightarrow{f} & c & \xleftarrow{g} & b \\
 & \searrow f' & \downarrow h & \swarrow g' & \\
 & & c' & &
 \end{array}$$

即ち, $\langle a, b \rangle$ から Δ への普遍射とは余直積 $a \amalg b$ のことである.

同様に以下の方が分かる.

- $\Delta: C \rightarrow C \times C$ から $\langle a, b \rangle$ への普遍射が直積 $a \times b$ である.
- $!: C \rightarrow \mathbf{1} = \{0\}$ を一意に定まる関手として, 0 から $!$ への普遍射 $\langle c, f \rangle$ が存在とする. このとき c が始対象である. 同様に $!$ から 0 への普遍射を $\langle c, f \rangle$ とすれば c が終対象である.
- $J := \{ * \leftarrow * \rightarrow * \}$ として $\Delta: C \rightarrow C^J$ を対角関手とすれば, $(a \leftarrow c \rightarrow b) \in C^J$ から Δ への普遍射が pushout である. pullback も同様.
- 同様に, $J = \{ * \rightrightarrows * \}$ の場合が equalizer, coequalizer である. \square

定義. J, C を圏として $\Delta: C \rightarrow C^J$ を対角関手とする.

- (1) 関手 $T: J \rightarrow C$ を図式 (diagram) という*¹. また J を図式 T の添え字圏 (index category) という.
- (2) Δ から $T \in C^J$ への普遍射 $\langle \lim T, \pi \rangle$ を図式 T の極限 (limit) という.
- (3) $T \in C^J$ から Δ への普遍射 $\langle \operatorname{colim} T, \mu \rangle$ を図式 T の余極限 (colimit) という*².

定義. (1) 圏 J が有限 $\iff \operatorname{Mor}(J)$ が有限集合.

- (2) 圏 J が小圏 (small category) $\iff \operatorname{Mor}(J)$ が集合.
- (3) 添え字圏が有限な図式の極限を有限極限 (finite limit), 余極限を有限余極限 (finite colimit) という.
- (4) 添え字圏が小圏となる図式の極限を小極限 (small limit), 余極限を小余極限 (small colimit) という.
- (5) 添え字圏が集合 (小離散圏) となる図式の極限を小直積 (small product), 余極限を小余直積 (small coproduct) という. この場合, 図式 $T: J \rightarrow C$ は Tj ($j \in J$) で決まる. そこで C の対象の族 $\{a_j\}_{j \in J}$ が与えられたとき, $Tj := a_j$ で定まる図式 T の極限を $\prod_{j \in J} a_j$, 余極限を $\coprod_{j \in J} a_j$ と書くことが多い.
- (6) 添え字圏が有限集合 (有限離散圏) となる図式の極限を有限直積 (finite product), 余極限を有限余直積 (finite coproduct) という.
- (7) C が完備 (complete) \iff 任意の小極限が存在する.
- (8) C が余完備 (cocomplete) \iff 任意の小余極限が存在する.
- (9) C が有限完備 (finitely complete) \iff 任意の有限極限が存在する.
- (10) C が有限余完備 (finitely cocomplete) \iff 任意の有限余極限が存在する.
- (11) C が小直積を持つ \iff 任意の小直積が存在する.
- (12) C が小余直積を持つ \iff 任意の小余直積が存在する.
- (13) C が有限直積を持つ \iff 任意の有限直積が存在する.
- (14) C が有限余直積を持つ \iff 任意の有限余直積が存在する.

自然変換 $T \Rightarrow \Delta c$ を余錐 (cocone) と呼ぶ. 従って余極限とは, 普遍性を持つ余錐のことだと言える. 同様に自然変換 $\Delta c \Rightarrow T$ を錐 (cone) といい, 極限とは普遍性を持つ錐のことだと言える. また $\mu: T \Rightarrow \Delta c$ が余極限を与えるとき (即ち, $\langle c, \mu \rangle$ が T の余極限の

*¹ 要は図式とは関手と同じ意味なのだが, 図式として扱いたい気持ちのときは図式と呼ぶことが多い.

*² 数学でよく出てくる射影極限 (projective limit)・逆極限 (inverse limit) は極限で, 帰納極限 (inductive limit)・直極限 (direct limit)・順極限は余極限である.

とき), μ を余極限余錐 (colimiting cocone) という. 極限の場合も同様に極限錐 (limiting cone) という.*³

命題 3. 小圏 J と関式 $T \in \mathbf{Set}^J$ に対して $\lim T \cong \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ である. 即ち \mathbf{Set} は完備である.

証明. $j \in J$ とする. $\alpha \in \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ を取ると $\alpha_j: 1 = \{*\} \rightarrow Tj$ が定まる. そこで $\pi_j(\alpha) := \alpha_j(*) \in Tj$ と置く. これにより自然変換 $\pi: \Delta(\mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)) \Rightarrow T$ が定まる. これが普遍射であることを示せばよい. その為に集合 x と自然変換 $\sigma: \Delta x \Rightarrow T$ を取る.

$$\begin{array}{ccc}
 \mathrm{Hom}(\Delta 1, T) & & \Delta(\mathrm{Hom}(\Delta 1, T)) \xrightarrow{\pi} T \\
 \uparrow f & & \uparrow \Delta f \quad \nearrow \sigma \\
 x & & \Delta x
 \end{array}$$

このとき写像 $f: x \rightarrow \mathrm{Hom}(\Delta 1, T)$ を次のように定める. $a \in x$ に対して $f(a): \Delta 1 \Rightarrow T$ を $f(a)_j: 1 \ni * \mapsto \sigma_j(a) \in Tj$ で定める. このとき $\pi \circ \Delta f = \sigma$ である.

∴ $j \in J, a \in x$ に対して

$$(\pi \circ \Delta f)_j(a) = \pi_j \circ f(a) = \pi_j(f(a)) = f(a)_j(*) = \sigma_j(a).$$

逆に $\pi \circ \Delta f = \sigma$ となるような f が一意であることも容易にわかる. 故に π が普遍射であり, $\lim T \cong \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ となる. □

命題 4. \mathbf{Set} は余完備である.

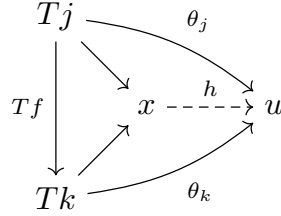
証明. まず \mathbf{Set} が小余直積を持つことは容易に分かる (非交和を取ればよい). そこで J を小圏, $T \in \mathbf{Set}^J$ を関手とすると余直積 $x := \coprod_{j \in \mathrm{Ob}(J)} Tj$ が存在する. $a \in Tj, b \in Tk$ に対して

$$aRb \iff \text{ある } f \in \mathrm{Hom}_J(j, k) \text{ が存在して } (Tf)(a) = b \text{ となる}$$

と定めれば, この R は x 上の二項関係を定める. R を含む最小の同値関係を \sim とする. このとき x/\sim が T の余極限になっていることを示す.

*³ 但し, [1] では余錐と錐の区別をせずにどちらも錐と呼んでいるようだ.

そのために任意の集合 u と自然変換 $\theta: T \Rightarrow \Delta u$ を取る. $x = \coprod_{j \in J} Tj$ の普遍性により射 $h: x \rightarrow u$ が一意に延びる.



このとき定義から明らかに, $a, b \in x$ に対して「 $a \sim b$ ならば $h(a) = h(b)$ 」である. 故に射 $x/\sim \rightarrow u$ が自然に定まる. \square

この証明は次のように一般化される.

定理 5. 小余直積と coequalizer を持つ圏 C は余完備である.

証明. J を小圏として, $T: J \rightarrow C$ を図式とする. $\text{Ob}(J)$ と $\text{Mor}(J)$ が集合だから, 仮定より余直積 $\langle \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj, \mu \rangle$ と $\langle \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f), \nu \rangle$ が存在する. 各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{dom } f = j$ となる $j \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから, $\text{id}: T(\text{dom } f) \rightarrow Tj$ を考えると射 $p: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性により定まる.

$$\begin{array}{ccc}
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{p} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \\
 \nu_f \uparrow & & \uparrow \mu_j \\
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj
 \end{array}$$

一方, 各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{cod } f = k$ となる $k \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから, 射 $Tf: T(\text{dom } f) \rightarrow Tk$ を考えると射 $q: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性により定まる.

$$\begin{array}{ccc}
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk \\
 \nu_f \downarrow & & \downarrow \mu_k \\
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj
 \end{array}$$

仮定より p, q の coequalizer $e: \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \rightarrow c$ が存在する. $\eta_j := (Tj \xrightarrow{\mu_j} \coprod Tj \xrightarrow{e} c)$ と定める.

$$\begin{array}{ccccc}
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk & & \\
 \nu_f \downarrow & & \mu_k \downarrow & \searrow \eta_k & \\
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightleftharpoons[p]{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj & \xrightarrow{e} & c \\
 \nu_f \uparrow & & \mu_j \uparrow & \nearrow \eta_j & \\
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj & &
 \end{array}$$

このとき η は自然変換 $\eta: T \Rightarrow \Delta c$ である.

\therefore) $f: j \rightarrow k$ を T の射とする. $\eta_k \circ Tf = \eta_j$ を示せばよい. まず上の図式の上半分, 下半分の可換性から $\eta_k \circ Tf = e \circ q \circ \nu_f$, $\eta_j = \eta_j \circ \text{id}_{Tj} = e \circ p \circ \nu_f$ が分かる. 一方 e は p, q の coequalizer だったから $e \circ p = e \circ q$ である. 従って $\eta_j = \eta_k \circ Tf$ が分かる.

η が T から Δ への普遍射であることを示せばよい. そのために任意の $\sigma: T \Rightarrow \Delta a$ を取る. このとき $\sigma_j: Tj \rightarrow a$ と coproduct の普遍性から $g: \coprod Tj \rightarrow a$ が得られる.

$$\begin{array}{ccccc}
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk & & \\
 \nu_f \downarrow & & \mu_k \downarrow & \searrow \eta_k & \\
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightleftharpoons[p]{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj & \xrightarrow{e} & c \\
 \nu_f \uparrow & & \mu_j \uparrow & \nearrow \eta_j & \\
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj & &
 \end{array}
 \begin{array}{c}
 \xrightarrow{\sigma_k} \\
 \xrightarrow{\sigma_j} \\
 \xrightarrow{g}
 \end{array}
 \rightarrow a$$

$g \circ p = g \circ q$ である.

\therefore) $f: j \rightarrow k$ を取る. g の取り方から $\sigma_j = g \circ p \circ \nu_f$, $\sigma_k \circ Tf = g \circ q \circ \nu_f$ となる. 今 σ が自然変換だから $\sigma_j = \sigma_k \circ Tf$ である. 故に $g \circ p \circ \nu_f = g \circ q \circ \nu_f$ が成り立つ. よって $\coprod T(\text{dom } f)$ の普遍性から $g \circ p = g \circ q$ である.

よって coequalizer の普遍性から $h: c \rightarrow a$ が存在して $h \circ e = g$ となる. このとき

$$(\Delta h \circ \eta)_j = h \circ \eta_j = h \circ e \circ \mu_j = g \circ \mu_j = \sigma_j$$

である。よって $\Delta h \circ \eta = \sigma$ である。 h の一意性も容易に分かるので、 $\langle c, \eta \rangle$ が T の余極限であることが分かった。 \square

双対を考えれば次も分かる。

定理 6. 小直積と equalizer を持つ圏は完備である。 \square

同様にして

定理 7. 有限直積と equalizer を持つ圏は有限完備であり、有限余直積と coequalizer を持つ圏は有限余完備である。 \square

$T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする。 $i \in I$ とすれば $T(i, -): J \rightarrow C$ は関手である。 よってこの関手の余極限 $\langle \text{colim } T(i, -), \mu_i \rangle$ を考えることができる。 念のため確認しておくとして、この μ_i は自然変換 $T(i, -) \Rightarrow \Delta(\text{colim } T(i, -))$ であり各 $k \in J$ に対して $(\mu_i)_k$ は C の射 $: T(i, k) \rightarrow \text{colim } T(i, -)$ となる。

定理 8. 各 $i \in I$ に対して余極限 $\langle \text{colim } T(i, -), \mu_i \rangle$ が存在するとき、関手 $F: I \rightarrow C$ が一意に存在して、以下の条件を満たす。

- (1) $i \in I$ に対して $F(i) = \text{colim } T(i, -)$ となる。
- (2) $(\mu_i)_k: T(i, k) \rightarrow F(i)$ が自然変換 $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ を定める

証明. $i_0, i_1 \in I, j_0, j_1 \in J, f: i_0 \rightarrow i_1, g: j_0 \rightarrow j_1$ とする。次は可換である。

$$\begin{array}{ccc} T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\ T(f, \text{id}) \downarrow & & \downarrow T(f, \text{id}) \\ T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \end{array}$$

一方次が可換である。

$$\begin{array}{ccc} T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\ (\mu_{i_0})_{j_0} \searrow & & \swarrow (\mu_{i_0})_{j_1} \\ & \text{colim } T(i_0, -) & \\ (\mu_{i_1})_{j_0} \searrow & & \swarrow (\mu_{i_1})_{j_1} \\ T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \\ & \text{colim } T(i_1, -) & \end{array}$$

これらを組み合わせて次の図式の実線部を得る.

$$\begin{array}{ccc}
 F(i_0) = \operatorname{colim} T(i_0, -) & \xrightarrow{F(f)} & \operatorname{colim} T(i_1, -) = F(i_1) \\
 \uparrow (\mu_{i_0})_{j_0} & & \uparrow (\mu_{i_1})_{j_0} \\
 & \swarrow (\mu_{i_0})_{j_1} & \swarrow (\mu_{i_1})_{j_1} \\
 & T(i_0, j_1) & \xrightarrow{T(f, \operatorname{id})} T(i_1, j_1) \\
 \nearrow T(\operatorname{id}, g) & & \nearrow T(\operatorname{id}, g) \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f, \operatorname{id})} & T(i_1, j_0)
 \end{array}$$

実線部は全て可換だから、余極限の普遍性により点線の射が得られる. これを $F(f)$ と定める. すると $F: I \rightarrow C$ は関手である.

∴) $F(f_1 \circ f_0) = Ff_1 \circ Ff_0$ と $F(\operatorname{id}) = \operatorname{id}$ を示せばよい.

$f_0: i_0 \rightarrow i_1, f_1: i_1 \rightarrow i_2$ を I の射とする. $F(f_0), F(f_1), F(f_1 \circ f_0)$ は次の図式により定義されるのであった.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & & & F(f_1 \circ f_0) \\
 & & & & \dashrightarrow \\
 F(i_0) & \xrightarrow{F(f_0)} & F(i_1) & \xrightarrow{F(f_1)} & F(i_2) \\
 \uparrow & & \uparrow & & \uparrow \\
 & \swarrow & & \swarrow & & \swarrow \\
 & T(i_0, j_1) & \xrightarrow{T(f_0, \operatorname{id})} & T(i_1, j_1) & \xrightarrow{T(f_1, \operatorname{id})} & T(i_2, j_1) \\
 \nearrow & & \nearrow & & \nearrow \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f_0, \operatorname{id})} & T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(f_1, \operatorname{id})} & T(i_2, j_0)
 \end{array}$$

よって余極限の普遍性により $F(f_1) \circ F(f_0) = F(f_1 \circ f_0)$ である. 同様に余極限の普遍性により $F(\operatorname{id}) = \operatorname{id}$ も分かる.

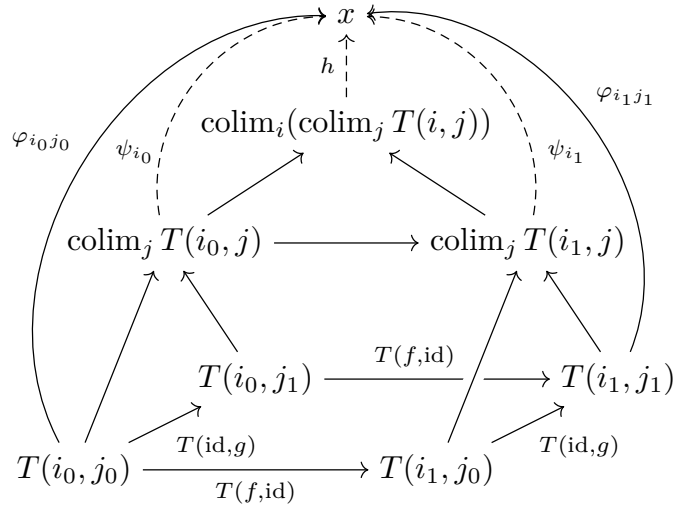
F の定義の仕方から, $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ は自然変換である. また余極限の普遍性から, このような F は一意であることも分かる. \square

定理 8 によって得られる関手 F は $\operatorname{colim} T(\square, -): I \rightarrow C$ とでも書くべき関手となるが, このように書いてしまうと何が何なのか分からなくなってしまふ. そこで, 関手 $G: J \rightarrow C$ に対して $\operatorname{colim}_j G(j) := \operatorname{colim} G$ のように「動かす変数」を colim の添え字で表すことにすると, 定理 8 で得られた関手 F は $\operatorname{colim}_j T(-, j)$ で表すことができる. (なお, 変数 j の動く範囲 (添え字圏) も明示したい場合には $\operatorname{colim}_{j \in J} G(j)$ のように書くことにする.)

さて、更にこの関手の余極限 $\text{colim}(\text{colim}_j T(-, j)) = \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ を考えられるが、一方「 i と j を同時に動かした」ときの余極限 $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ ($= \text{colim} T$) を考えることもできる。

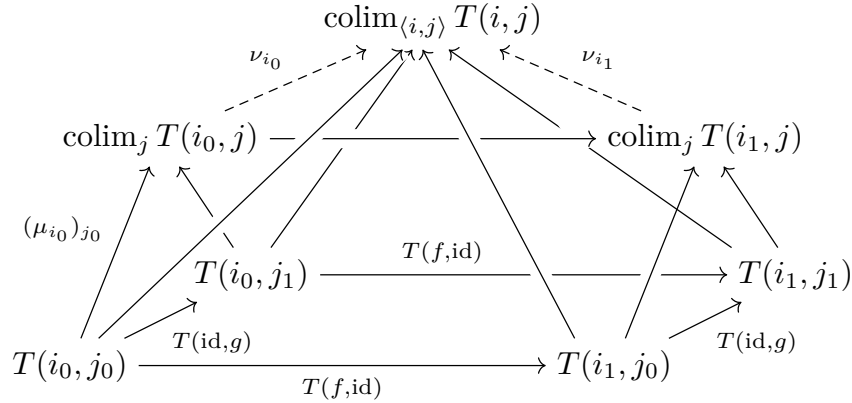
定理 9. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として各 $i \in I$ に対して余極限 $\text{colim}_j T(i, j)$ が存在するとする。このとき、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ と $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ のうちどちらか一方が存在すればもう一方も存在し、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \cong \text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ が成り立つ。

証明. $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が存在したとする。これが T の余極限となっていることを示そう。その為に任意の自然変換 $\varphi: T \Rightarrow \Delta x$ を取る。

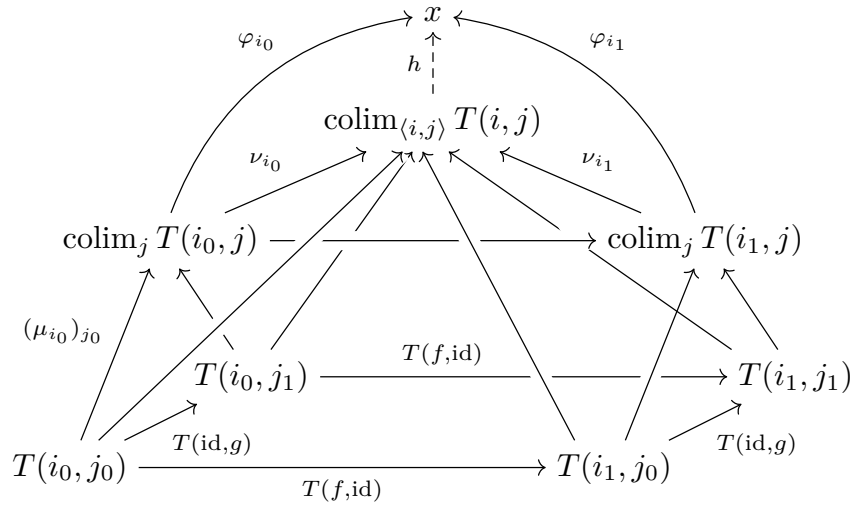


$\text{colim}_j T(i, j)$ の普遍性から、射 $\psi_i: \text{colim}_j T(i, j) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる。故に $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ の普遍性から射 $h: \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる。普遍性から、このような h が一意であることは容易に分かる。従って $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が T の余極限であることが分かった。

逆に $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j)$ が存在したとする.



余極限 $\text{colim}_j T(i,j)$ の普遍性から, 射 $\nu_i: \text{colim}_j T(i,j) \rightarrow \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j)$ が存在し可換となる. $\langle \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j), \nu \rangle$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限になることを示そう. その為に任意の自然変換 $\varphi: \text{colim}_j T(-, j) \Rightarrow \Delta x$ を取る.



するとこの図式の実線部は可換だから, 余極限 $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j)$ の普遍性により射 $h: \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j) \rightarrow x$ が存在して可換となる. このような h は明らかに一意だから, $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j)$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限であることが分かった. \square

よって, (各余極限が存在すれば) $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i,j)) \cong \text{colim}_j(\text{colim}_i T(i,j))$ となることが分かる. 即ち, 余極限の順序は交換可能である. 双対を考えれば, 同様のことが極限についても成り立つことが分かる^{*4}.

^{*4} 一方, 極限と余極限の交換については, 一般には成り立たない. これについては「フィルター圏」のPDFを参照.

さて、再び $T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする。このとき関手 $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ が得られるのであった（「自然変換・関手圏」の PDF を参照。）。よってこの余極限 $\text{colim } \tilde{T} \in C^J$ も考えることができる。

定理 10. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として、 $j \in J$ に対して余極限 $\langle \text{colim}_i T(i, j), \mu_j \rangle$ が存在するとする。このとき $\text{colim } \tilde{T}: J \rightarrow C$ も存在し、 $j \in J$ に対して $(\text{colim } \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が成り立つ。即ちこの場合、 \tilde{T} の余極限は各点ごとに計算すればよい。

証明. $P: J \rightarrow C$ を関手、 $\nu: \tilde{T} \Rightarrow \Delta(P)$ を自然変換とする。 $i \in I$ に対して $\nu_i: \tilde{T}(i) \Rightarrow P$ も自然変換である。 $j \in J$ に対して $(\nu_i)_j: T(i, j) \rightarrow Pj$ となる。次の実線の可換図式を得る。

$$\begin{array}{ccc}
 Pj_0 & \xrightarrow{Pg} & Pj_1 \\
 \uparrow \kappa_{j_0} & & \uparrow \kappa_{j_1} \\
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\quad} & \text{colim}_i T(i, j_1) \\
 \uparrow & & \uparrow \\
 T(i_1, j_0) & \xrightarrow{\quad} & T(i_1, j_1) \\
 \uparrow & & \uparrow \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f, \text{id})} & T(i_0, j_1) \\
 & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} &
 \end{array}$$

よって余極限の普遍性から $\kappa_j: \text{colim}_i T(i, j) \rightarrow Pj$ を得る。これで得られた四角

$$\begin{array}{ccc}
 Pj_0 & \xrightarrow{Pg} & Pj_1 \\
 \kappa_{j_0} \uparrow & & \uparrow \kappa_{j_1} \\
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\text{colim}_i T(i, g)} & \text{colim}_i T(i, j_1)
 \end{array}$$

は、余極限の普遍性により可換である。従って $\kappa: \text{colim}_i T(i, -) \Rightarrow P$ は自然変換である。このような自然変換 κ は、余極限 $\text{colim}_i T(i, j)$ の普遍性から一意的であることが分かるから、 $\tilde{T} \Rightarrow \Delta(\text{colim}_i T(i, -))$ は普遍射であり、 $(\text{colim } \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が分かった。□

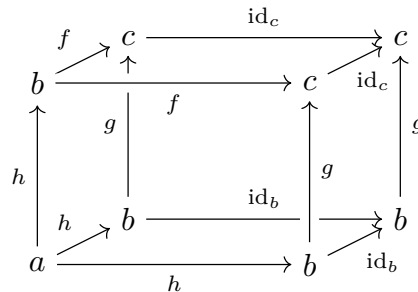
系 11. 圏 D が余完備ならば D^C も余完備である。双対的に、圏 D が完備ならば D^C も完備である。□

例 12. 圏 C に対して $\widehat{C} = \mathbf{Set}^{C^{\text{op}}}$ は完備かつ余完備である. □

例 13. $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ の余極限が存在したとしても, $\text{colim}_i T(i, j)$ が存在するとは限らない. 例えば $J = \mathbf{2}$ として, 圏 C を

$$a \xrightarrow{h} b \begin{matrix} \xrightarrow{f} \\ \xrightarrow{g} \end{matrix} c$$

で $f \circ h = g \circ h$ を満たすものとする. $C^J = C^{\mathbf{2}}$ は C の arrow category である. $C^{\mathbf{2}}$ の次の図式を考える. (縦向きの射が $C^{\mathbf{2}}$ の対象である.)



この図式は pushout を与えていることが分かる. この図式で, 底面の四角が $0 \in \mathbf{2}$ 成分であるが, 圏 C において $b \xleftarrow{h} a \xrightarrow{h} b$ の pushout は存在しない. □

例 14. $\theta: F \Rightarrow G: C \rightarrow D$ を自然変換として D は余完備であるとする. このとき θ が (D^C の射として) エピ射 \iff 各 $a \in C$ に対して θ_a がエピ射である*5.

∴) 一般に, 射 $f: a \rightarrow b$ がエピ射であることは

$$\begin{array}{ccc} a & \xrightarrow{f} & b \\ f \downarrow & & \downarrow \text{id}_b \\ b & \xrightarrow{\text{id}_b} & b \end{array}$$

が pushout になることと同値であった (「双対」の PDF を参照). 故に定理 10 により

*5 \Leftarrow は D が余完備でなくても成り立つ. \Rightarrow については例 13 も参照.

θ がエピ射 \iff 次の図式が pushout

$$\begin{array}{ccc} F & \xrightarrow{\theta} & G \\ \theta \downarrow & & \downarrow \text{id}_G \\ G & \xrightarrow{\text{id}_G} & G \end{array}$$

\iff 各 $a \in C$ に対して次の図式が pushout

$$\begin{array}{ccc} Fa & \xrightarrow{\theta_a} & Ga \\ \theta_a \downarrow & & \downarrow \text{id}_{Ga} \\ Ga & \xrightarrow{\text{id}_{Ga}} & Ga \end{array}$$

\iff 各 $a \in C$ に対して θ_a がエピ射.

特に, \widehat{C} の射がエピ射であるかどうかは, 全ての成分が全射かどうかで決まる.

双対を考えれば, モノ射についても同様であることが分かる. \square

定義. 関手 $F: C \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能関手 (representable functor)

\iff ある対象 $a \in C$ と自然同型 $F \cong \text{Hom}_C(a, -)$ が存在する.

また, このとき a は F を表現するという.

※ 反変関手の場合, つまり関手 $F: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能とは $F \cong \text{Hom}_{C^{\text{op}}}(a, -)$ と書けることであるが, $\text{Hom}_{C^{\text{op}}}(a, -) = \text{Hom}_C(-, a)$ だから, この場合は表現可能関手とは $F \cong \text{Hom}_C(-, a)$ と書けることだと思ってよい.

命題 15. 表現可能関手 F を表現する対象は同型を除いて一意である.

証明. $F \cong \text{Hom}_C(a, -) \cong \text{Hom}_C(b, -)$ とすれば米田の補題により $a \cong b$ である. \square

$F: C \rightarrow \mathbf{Set}$ を表現可能関手として $\alpha: \text{Hom}_C(a, -) \Rightarrow F$ を自然同型とする. このとき米田の補題により $x \in Fa$ が得られる. 逆に $a \in C$ と $x \in Fa$ を任意に取れば, 米田の補題により自然変換 $\alpha: \text{Hom}_C(a, -) \Rightarrow F$ が得られるが, 勿論これは同型とは限らない. そこで, どのような a, x を取ったら α が同型になるかという問題が考えられる. これは次のように普遍性で述べることができる.

定理 16. $\alpha: \text{Hom}_C(a, -) \Rightarrow F$ を自然変換として米田の補題で α に対応する $x \in Fa$ を

取る. このとき α が同型 \iff 任意の $b \in C$, $u \in Fb$ に対して, ある射 $h: a \rightarrow b$ が一意に存在して $Fh(x) = u$ となる.

証明. (\implies) $b \in C$, $u \in Fb$ とする. α が自然同型だから $\alpha_b: \text{Hom}_C(a, b) \rightarrow Fb$ は全単射である. よって $\alpha_b(h) = u$ となる $h: a \rightarrow b$ が存在する. このとき α の自然性により

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_C(a, a) & \xrightarrow{\alpha_a} & Fa \\ \downarrow h \circ - & & \downarrow Fh \\ \text{Hom}_C(a, b) & \xrightarrow{\alpha_b} & Fb \end{array} \qquad \begin{array}{ccc} \text{id}_a & \xrightarrow{\alpha_a} & x \\ \downarrow h \circ - & & \downarrow Fh \\ h & \xrightarrow{\alpha_b} & u \end{array}$$

$Fh(x) = u$ となる.

(\impliedby) 任意の $b \in C$ に対して α_b が同型であることを示す. 米田の補題の証明により, α_b は $f: a \rightarrow b$ に対して $\alpha_b(f) = Ff(x)$ で与えられる. 故に仮定の条件は α_b が同型であることを意味している. \square

定理 16 の条件は「コンマ圏 $1 \downarrow F$ において $\langle a, x \rangle$ が始対象となる」と言い換えることができる (1 は関手 $\mathbf{1} \ni * \mapsto 1 \in \mathbf{Set}$). 従って次の系を得る.

系 17. 関手 $F: C \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能 $\iff 1 \downarrow F$ が始対象を持つ. \square

系 18. $G: D \rightarrow C$ を関手として, $c \in C$ を取る. このとき

c から G への普遍射が存在する $\iff \text{Hom}_C(c, G(-))$ が表現可能関手.

証明. $F := \text{Hom}_C(c, G(-))$ とする. このときコンマ圏 $1 \downarrow F$ とは次のような圏である.

- 対象は $a \in C$ と射 $f: c \rightarrow Ga$ の組 $\langle a, f \rangle$ である.
- $\langle a, f \rangle$ から $\langle b, g \rangle$ への射とは C の射 $k: a \rightarrow b$ であって $Gk \circ f = g$ を満たすものである.

$$\begin{array}{ccc} c & \xrightarrow{f} & Ga \\ & \searrow g & \downarrow Gk \\ & & Gb \end{array} \qquad \begin{array}{c} a \\ \downarrow k \\ b \end{array}$$

従って $1 \downarrow F = c \downarrow G$ である。故に

$$\begin{aligned}
 F \text{ が表現可能} &\iff 1 \downarrow F \text{ が始対象を持つ} && \text{(系 17)} \\
 &\iff c \downarrow G \text{ が始対象を持つ} \\
 &\iff c \text{ から } G \text{ への普遍射が存在する} && \text{(普遍射の定義)}
 \end{aligned}$$

である。 □

双対を考えれば

定理 19. $F: C \rightarrow D$ を関手として、 $d \in D$ を取る。このとき

$$F \text{ から } d \text{ への普遍射が存在する} \iff \text{Hom}_D(F(-), d) \text{ が表現可能関手.}$$

□

例 20. C を圏、 $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とすると、 Δ から $\langle a, b \rangle \in C \times C$ への普遍射が直積であった。よって直積 $a \times b$ が存在すれば $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle)$ は表現可能関手である。系 18 の証明から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, a \times b)$ となることが分かる。特に $x \in C$ に対して $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(x, a \times b)$ である。ここで圏の直積の定義から $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) = \text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ となるので $\text{Hom}(x, a \times b) \cong \text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ である。(故に、直積を取る操作と $\text{Hom}(x, -)$ を適用する操作は「可換」であると言える)

逆に $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, r)$ となるような $r \in C$ が存在するならば、系 18 の証明より $r \cong a \times b$ となることが分かる。また圏の直積の定義から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ が分かるから、直積 $a \times b$ とは関手 $\text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ を表現する対象のことであると言える。 □

今の例で、直積と $\text{Hom}(x, -)$ が交換できることは次のように一般化できる。

定義. $T: J \rightarrow C$, $F: C \rightarrow D$ を関手とし、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。 F が極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ と交換するとは、 $\langle F(\lim T), F\pi \rangle$ が FT の極限となることを言う。余極限との交換も同様に定義する。

定理 21. $\text{Hom}_C(c, -)$ は任意の極限と交換する。

証明. J を圏、 $T: J \rightarrow C$ を関手として、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。次の図

式が関手 $\text{Hom}(c, T-): J \rightarrow \mathbf{Set}$ の極限を与えることを示せばよい。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}(c, Tj) & & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \\
 & \text{Hom}(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \\
 \text{Hom}(c, Tk) & &
 \end{array}$$

その為に任意の $x \in \mathbf{Set}$ と自然変換 $\theta: \Delta x \Rightarrow \text{Hom}_C(c, T-)$ を取る。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_C(c, Tj) & \xleftarrow{\theta_j} & x \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \searrow \theta_j \\
 & \text{Hom}_C(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \searrow \theta_k \\
 \text{Hom}_C(c, Tk) & \xleftarrow{\theta_k} & x
 \end{array}$$

可換性から、任意の $a \in x$ に対して $Tf \circ (\theta_j(a)) = \theta_k(a)$ である。即ち次の図式の外側の三角形が可換であり、よって $\lim T$ の普遍性から $h(a): c \rightarrow \lim T$ が一意に存在して可換となる。

$$\begin{array}{ccc}
 Tj & \xleftarrow{\theta_j(a)} & c \\
 \downarrow Tf & \swarrow \pi_j & \searrow h(a) \\
 & \lim T & \\
 \downarrow Tf & \swarrow \pi_k & \searrow \theta_k(a) \\
 Tk & \xleftarrow{\theta_k(a)} & c
 \end{array}$$

この $h(a)$ は写像 $h: x \rightarrow \text{Hom}_C(c, \lim T)$ を与える。次の図式が可換になることを示せばよい。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_C(c, Tj) & \xleftarrow{\theta_j} & x \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \searrow h \\
 & \text{Hom}_C(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \searrow \theta_k \\
 \text{Hom}_C(c, Tk) & \xleftarrow{\theta_k} & x
 \end{array}$$

即ち、任意の $a \in x$ に対して $\pi_j \circ (h(a)) = \theta_j$ を示せばよいが、それは $h(a)$ の定義から明らか。逆に、このような h の一意性も $h(a)$ の一意性から分かる。

以上により $\langle \text{Hom}_C(c, \lim T), \text{Hom}_C(c, \pi) \rangle$ が $\text{Hom}_C(c, T-)$ の極限である。 \square

参考文献

- [1] Saunders Mac Lane, Categories for the Working Mathematician, Springer, 2nd ed. 1978 版 (1998)
- [2] G.M. Kelly, Basic Concepts of Enriched Category Theory, Cambridge University Press, Lecture Notes in Mathematics 64 (1982), section 3.3,
<http://tac.mta.ca/tac/reprints/articles/10/tr10abs.html>